

日本性科学会 ニュース

第33巻 第4号

平成26年（2014年）12月

発行人：大川 玲子 印刷所：(株) 絢文社

2015年研修会・学術集会・研究会の開催予告

1. 第9回 日本性科学会近畿地区研修会

日 時：2015年2月22日（日）13:00～16:30

場 所：あべのハルカス 25F 会議室C・D 天王寺駅、大阪阿部野橋、空港バス直結

学会認定等 日本性科学会5単位 日本産科婦人科学会申請中

テーマ：精神医学と性 ～一般臨床家へのメッセージ～

プログラム（予定）

教育講演 演 者 はりまメンタルクリニック 針間 克己 先生

関西医科大学 織田 裕行 先生

コーディネーター あべメンタルクリニック 阿部 輝夫 先生

参加費：一般 5,000円 学生1,000円

担当理事：大阪市立大学 石河 修

連絡先：森村美奈 TEL：06-6645-3797（総合診療センター）

2. 第44回セックス・カウンセリング研修会

日 時：2015年5月24日（日）

場 所：東京慈恵会医科大学西新橋校（東京）

※昼休みに、2015年度日本性科学会総会を開催いたします。

3. 第35回日本性科学会学術集会／第16回性科学セミナー

日 時：2015年10月10日（土）第16回性科学セミナー／2015年10月11日（日）第35回日本性科学会

場 所：埼玉県民健康センター 1F 大会議室AおよびB、2F 大ホール

〒330-0062 さいたま市浦和区仲町3-5-1 TEL：048-824-4801

JR 浦和駅（西口）より800m（徒歩約10分）または JR 中浦和駅（西口）から1,100m（徒歩13分）

会 長：石原 理 埼玉医科大学産科婦人科学教授

テーマ：性のディスコースを超えて

特別講演：「民族生殖理論と性」 東京外国語大学総合国際学研究院教授（文化人類学） 栗田 博之

シンポジウムⅠ：「コミュニケーションとしての性を教える」

シンポジウムⅡ：「エ・アロール～中高年からの性を謳歌する」

一般演題

懇親会（日本性科学連合第16回性科学セミナーと合同）：2015年10月10日（土）

埼玉県民健康センター 1F 大会議室C

第35回日本性科学会事務局：〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

埼玉医科大学産科婦人科学教室 担当：鈴木元晴

TEL：049-276-1347（産婦人科医局）FAX：049-294-8305

E-mail: jsss35@saitama-med.ac.jp 学会ホームページ：http://jsss35.kenkyuukai.jp/

4. 症例研究会

日 時：2015年1月29日（木）18:30～20:30 早乙女智子先生

3月25日（水）18:30～20:30

場 所：日本性科学会カウンセリング室 〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

※ご担当の先生の都合により、日程が変更になる場合があります。

今後の症例・話題提供者も募集しております。

Vol. 33

№.
4

日本性科学会

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

TEL・FAX 03-3868-3853

「明日からED（元の表現を筆者の判断で変更）の研究せよ」

それは、私が精神神経科に入職して2年目の秋に訪れた突然の出来事でした。研究室にいた私のところに、ふらりと立ち寄られた教授からの一言です。

「ED……ですか。どのように研究したら良いのですか？」

「図書館に行って、雑誌などを調べてやなあ…。」

この出来事こそが、精神科医としての私の方向性を決定したと言っても過言ではありません。今より少しは素直で純粹だった私は、躊躇するほどの不安は持ち合わせておらず、戸惑い無く「性」の領域に足を踏み入れることになりました。まだ、EDに共感するには程遠い20代の頃のことです。

関心を持ち始めた私が、そのように感じていただけかも知れませんが、「性」に関して幾つかの出来事がこの頃立て続けに生じていました。平成10年10月に埼玉医科大学において性同一性障害の治療として性別適合手術が施行され、平成11年1月にはシルデナフィルが製造承認を受け、3月に販売が開始されました。

そのような時代の中で、再び言葉が降りてきました。

「性同一性障害の受診者も外来に來られたから（元の表現を筆者の判断で変更）、EDと並行して研究せよ」

この出来事は、精神科医としてだけではなく、私の人生までも左右するきっかけとなったと、もう少し時が経てば確信が持てるように思っています。

その後、性同一性障害については、平成16年に日本精神神経学会の性同一性障害に関する委員会委員、平成17年にGID学会理事、翌年からは監事など、当時30半ばの浅学で若輩者の私に短期間に多くのことを学べる環境を与えて頂きました。このような環境を与えて頂いた性同一性障害に関する委員会委員長を務めておられた中島豊爾先生、GID学会理事長を務められた原科孝雄先生、大島俊之先生を始め、多くの先生方に今でも深い感謝の気持ちで一杯です。現在、様々な理由により、性同一性障害に対する医療を関西医科大学で完結することは困難な状況にあります。しかし、平成18年から関西GIDネットワークとして複数の医療施設や医療従事者と連携を図り、平成22年にはNPO法人の承認を受け、多施設連携の構造の中でこの医療に継続して取り組んでいます。

また、当初と比べればEDの臨床に携わることは減りましたが、ED診療ガイドライン2012年版の作成に微力ながら関わらせて頂き、様々なことを学ばせて頂きました。木元康介先生を始め、御指導頂いた先生方に深謝致しております。

このような経緯で「性」に関して学ばせて頂きながら、一方で、平成13年4月からの1年間は関西医科大学附属病院高度救命救急センター（現、関西医科大学附属滝井病院救命救急センター）で勤務し、自殺未遂者への介入を始め様々な精神医学的实践もさせて頂きました。このことをきっかけに「自殺」に関する予防や対策の臨床と研究にも従事させて頂くようになり、本年8月にLANCETに掲載された論文のもとになった「自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果：多施設共同による無作為化比較研究（A randomized, controlled, multicenter trial of post-suicide attempt case management for the prevention of further attempts in Japan (ACTION-J)）」や、地域自殺対策緊急強化基金をもとに大阪府の自殺未遂者実態調査事業や自殺未遂者連携支援事業などにも施設として参画させて頂いています。

「性」と「自殺」、期せずして私が取り組ませて頂くこととなった、とても悩ましいこの二つの領域は、必ずしも個々に独立した領域ではないと考えています。

かつて、本学でご講演頂いた故大原健士郎先生は、次のように述べておられました。

「精神科医が避けて通る分野が二つあります。性に関することと自殺に関することです。」

この言葉が指し示すところによれば、「性」と「自殺」という二つの領域を避けず、むしろ医師となつてからのほとんどの時間をこの二つの領域に費やした私は、もはや精神科医にはなれないのかも知れません。しかし、そうならないよう一層の研鑽を日々重ねて参りますので、日本性科学会会員の皆様におかれましては今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

◆役員など

〈日本精神神経学会〉性同一性障害に関する委員会委員、〈日本性機能学会〉理事・ED診療ガイドライン作成委員会委員・心因性ED検討委員会委員・GID委員会委員・倫理委員会委員、〈GID学会〉監事・広報渉外委員会委員、〈NPO法人関西GIDネットワーク〉理事、〈日本総合病院精神医学会〉評議員・自殺問題委員会委員、国立大学法人和歌山大学客員教授（宇宙教育研究所）

第13回アジア・オセアニア性科学会参加報告

東京大学石丸研究室 大野 諒 太

第13回アジア・オセアニア性科学会に、石丸径一郎先生とゼミメンバー6人で参加した。2年前に開催された島根の学会のときは、石丸先生と私の2人での参加であったが、今回はメンバーが増え、賑やかな雰囲気があった。

今回の学会では、修士課程で研究を行った、ゲイ・バイセクシュアル男性としてのアイデンティティの発達がメンタルヘルスに与える影響について、発表を行った。研究の大まかな内容は、ゲイ・バイセクシュアル男性としてのアイデンティティの発達が、自尊心に正の影響を与えているのかを、量的な調査によって明らかにするというものである。

発表後のことだったが、私にとって夢のような出来事が起きた。なんと Curtin 大学の Cass 先生に、声をかけていただいたのである。彼女は、LGBのアイデンティティ発達理論(1979,1984)を考えた方で、僕にとっては、スーパースターのような研究者である。この理論は、LGBについて勉強したことがある人であれば、必ず学ぶ理論のひとつであると言え、日本のLGBに対する臨床場面でもしばしば取り上げられている理論である。もちろん私も、学部生の頃から、彼女の理論に多くのことを学ばせていただいたし、今回の研究においても、彼女の理論に則って、研究参加者を、アイデンティティの「混乱群」と「発達群」に分けて、その違いについて分析を行っている。これまでずっと参考にしてきた理論をつくったCass先生にお会いできるとは夢にも思っておらずとても驚いた。Cass先生はとても温かい方で、「これからも一生懸命に研究に励むのよ」と激励して下さった。

また、性の権利 (Sexual Rights) について議論する、ユースラウンドテーブルにも参加させていただいた。参加者はオーストラリアの学生2人、日本の学生2人と少人数ではあったが、その分、議論は濃くなった。一番印象に残っているのは、「性」についての認識が、この2カ国で大きく異なっている事を実感したことである。たとえば、オーストラリアでは、ピア教育というものがあり、年上のものが年下のものに対して、性のことについて教える機会があるという。またそのとき、第二次性徴といった体の変化だけでなく、カップルの関係性について話す場合もあるとのことだった。一方、日本といえば、家族の中では、子どもは性的な存在としては考えられておらず、また仲間の中では、性的なものの獲得が競争される場合もあることが話された。こうした議論の中で、私が初めて「性の権利」という言葉を知ったときのことを思い出した。それは卒論の資料を集めているときだったが、目から鱗が落ちるようだったことを今でも覚えている。自分の「性」が「権利」であるという感覚を持つことは、なかなか難しい現状が日本にはあるように感じる。このラウンドテーブルで、自分の原点を再認識する有意義な時間を過ごすことができた。このような機会を設けて下さった主催者の方にお礼を申し上げたい。

こうしてあっという間に、4日間が過ぎていった。学会期間中は、様々な研究者の方々と話をさせていただいた。情熱的に研究に取り組んでいるその姿にはたくさんの刺激を受け、私もそんな研究者になりたいと感じた。またゼミメンバーとブリスベンの街を散策したり、植物園に行ったり、ゲイクラブに行ったりすることができ、勉学だけでなく、観光や寝食をともにしながら交流することができたことも思い出のひとつになった。最後になりますが、このような機会を与えて下さった、石丸先生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

資格認定委員会より

日本性科学会副理事長（認定制度担当） 阿 部 輝 夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定、並びに更新規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基づき、2014年度の新規資格認定並びに更新資格認定を行いました。厳正なる審査に結果、以下のように新規セックス・カウンセラー1名、セックス・セラピスト5名、更新カウンセラー2名、セックス・セラピスト2名が認定されました。

新規認定

セックス・カウンセラー 花村 温子

セックス・セラピスト 石丸徑一郎 花村 温子 丹羽 咲江 内田 洋介 菅沼 信彦

更新認定

セックス・セラピスト 永井 敦 岩佐 厚

セックス・カウンセラー 佐藤 昭雄 島 典子

来年度も新規認定、並びに更新認定（2010年資格取得者が該当）の手続きが行われます。申請を希望される方は、日本性科学会雑誌2014年 vol.32 no.1掲載の 資格認定規定並びに資格更新規定を御熟読の上、ご準備をお願い致します。特に、学術集会・研修会などに御出席の受講証・出席証は、必ず御保管下さい。

従来、新規認定申請時に4,000字前後2例のケースレポートの提出が義務付けられておりましたが、2015年度より2,000字前後2例のケースレポート提出に変更となります。この機会にぜひご申請をご検討ください。

申請の詳細は、2015年6月発行のニュースに掲載されます。

書籍紹介

『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛、性同一性障害を理解する』

はりまメンタルクリニック 針 間 克 己

このたび、『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援—同性愛、性同一性障害を理解する』を出版したので、紹介させていただきます。この本は、同性愛のメンタルヘルスに取り組んでいる精神科医の平田俊明先生と共編で出版したものです。同性愛や性同一性障害を扱った本は、これまでもありましたが、我が国では、心理的支援に焦点を絞ったものはほぼなかったと思われます。同性愛は、かつて精神疾患であったのちに、精神疾患リストから外れたという歴史的経緯があります。そのため、そのメンタルヘルスについて論じることが、専門家の間でためらいがあったのです。性同一性障害は、これまで「性別適合手術」や「戸籍の性別変更」といった、身体治療や法的問題に注意が向かいがちでした。しかし、心理的側面も同様に重要なのです。最近では性同一性障害概念が広がりを見せており、必ずしも身体治療を求めず性別違和を訴える者も増えているので、なおさらです。

本書の執筆陣は、現場の第一線で取り組んでおられる先生方に担当していただきました。いずれも、実際の経験に裏付けされ、リアルな言葉で書かれ、現場で役に立つ論文です。3部構成で、「第Ⅰ部 セクシュアル・マイノリティの基本概念と歴史」「第Ⅱ部 セクシュアル・マイノリティへの心理的支援の実践」「第Ⅲ部 心理職の訓練と果たすべき役割」となっています。ライフステージ別、あるいは学校や職場での対応など具体的状況ごとに全体で20の論文があります。本書が、メンタルヘルスに関わる人々の手元におかれ、日本の多様なセクシュアリティをもつ人々の支援の一助になれば幸いです。